文化と分化

山川静夫

このところ京都へ行くことが多くなった。それが、私の人生の大きな楽しみにもなっている。

お寺の庭でも、料亭の庭でも、そのたたずまいが、京都は実に美しい。その美しさはどこからくるのか。自然に対して素直なようでもあり、また、人が手を加えたことによって美しく見えるようでもある。

フランスのベルサイユ宮殿の庭園を眺めると、いかにも人工的だという気がする。植木を強引に三角にしたり菱形にしたりしていることが見え見えなのだ。

イギリスの公園などは、また趣きがちがう。ごく自然体である。樹木はのびるにまかせ、必要最小限の手入れしかしていないのではないかと思ったりする。

しかし、京都の庭園はそのどちらでもない。借景をうまく利用したりして自然を十分に大切にしながら、実にいいセンスの人間が巧みに手を加えたのか、自然と人工が互いに調子をとりながら、日本人の感性をよびさます美しさを醸(かも)し出している。そこに京都のすごさがある。

もうひとつ、京都でいつも感心するのは、長屋風の家に住む庶民階級の人たちにも、どこかしら美意識がしっかりと根付いているということだ。私が訪れた或る職人さんの家などは、本当にせまい家なのに、ほんのわずかな空間を利用して「床の間」を感じさせるスペースをつくり、そこに、近くで摘んできた草花が生けてあったりする。普通なら、そんなわずかなスペースを育(はぐ)んできたようだ。

文化とは、よいものが隅々にまでしみわたることだと私は思う。一人の人間や、一つのグループが、いくら美意識をかかえこんでいても、それは、文化とはいい難い。あまねく、広く、美しいものや良いものが理解され、身につくことなのではないか。

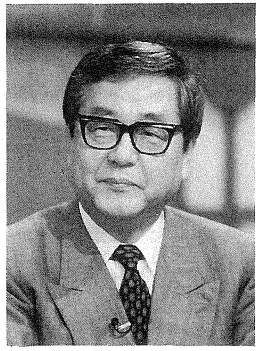
文化は、生物学でいう「分化」に似ている。人間の体は毎日たくさんの細胞を生み出す。しかし、最初は未分化の細胞で、何の役目も果たさない。その未分化の細胞が分化することによって、血となり肉となり骨になる。人間の体に役立つためには「分化」が不可欠なのである。

それと同じように「文化」も、美しいものや良いものがおおぜいの人の身につくような分化が大切なのであって、そうでなければ文化とは言えない。しかも、それが理屈で納得できるものでなく、一人一人の感性がよりどころになるのだから厄介だ。

日本の伝統芸能には、他国の追随を許さない立派なものが沢山ある。歌舞伎も文楽もそうだと思いたい。だが、これらの芸能は大都会を中心に育まれてきた。地方に育った人たちは、それが立派なものだと聞き及んではいても、なかなかじかにふれる機会がめぐってこなかった。だから一部の人々にだけもてはやされて、大部分の地方の人たちは置いてけぼりのような状態を余儀なくされた。これは日本にとって不幸であった。

エッセイ

随想



やまかわ・しずお／1933年静岡市生まれ。エッセイスト。静岡高校、国学院大学文学部卒後、56年NHKに入局。アナウンサーとして活躍。専務理事待遇・特別主幹を経て、現在フリー。三越劇場にて「山川静夫名人劇場」主宰。91年より国語審議会委員。著書「名手名言」にて1990年度日本エッセイストクラブ賞。

スでもあれば戸棚など置きたいところだが、京都の人はそこをかたくなに〝美の空間〟とする姿勢をくずさない。単なる装飾ではなく、また、他人に見せるハッタリでもなく、みずからが「美」を楽しむところまで昇華しているところが京都人らしい。

祇園祭の、あの巨大なエネルギーはどこからくるのか。これも面白い。季節に合わせて徹底した手間のかけ方は並ではない。それを京都人はごく当たり前のように毎年みごとにやりとげる。それは宗教心ではないか。豊かな日本の四季や神や仏のおかげで自分たちの生活が成り立っているという感謝の気持ちが、神を街なかに迎える喜びにたかまるのではないか。そう思えてくるのである。

こうして考えてくると、どうやら京都の美しさは、自然と人間の融合、豊かな宗教心、そして、「美」を無駄なものと考えない、この三つが、あらゆる階級の隅々にまで浸透しているらしく、そこに京都人独特のセンスでもあれば戸棚など置きたいところだが、京都の人はそこをかたくなに〝美の空間〟とする姿勢をくずさない。単なる装飾ではなく、また、他人に見せるハッタリでもなく、みずからが「美」を楽しむところまで昇華しているところが京都人らしい。

祇園祭の、あの巨大なエネルギーはどこからくるのか。これも面白い。季節に合わせて徹底した手間のかけ方は並ではない。それを京都人はごく当たり前のように毎年みごとにやりとげる。それは宗教心ではないか。豊かな日本の四季や神や仏のおかげで自分たちの生活が成り立っているという感謝の気持ちが、神を街なかに迎える喜びにたかまるのではないか。そう思えてくるのである。

こうして考えてくると、どうやら京都の美しさは、自然と人間の融合、豊かな宗教心、そして、「美」を無駄なものと考えない、この三つが、あらゆる階級の隅々にまで浸透しているらしく、そこに京都人独特のセン

その人たちに、どうしたら、伝統芸能の持つ美しさをわかってもらえるのか。それを考えるのも文化行政の一つであろう。理屈で説得するのではなく、他人の感覚に訴えるのだから、文化行政は一段と難しい。

総じて、役所仕事は実生活の合理性や理屈を重んじる。ところが、文化というものはその対極にあって、つかみどころのない「美意識」というものを、行政が隅々にまで行き届かせるのは、さぞや大変だろう。そこで問題になるのが、幼い時からの教育である。

これまでの日本の教育は、知識万能でセンス無頓着の教師が、一方的に教え込む〝一方通行〟の傾向が強かった。教育で大切なのは、よく考えさせること、価値判断をしっかり持たせること、そして、感性を豊かにさせること、特にこの三つ目がこれからは大切になってくる。美しいものに沢山ふれさせ、自分の意志でみずから学ぼうという意欲を持たせることである。

こういうことを世間全体が大切に考えはじめると、その環境の中で幼い時から美意識が自然に芽生えてくる。未分化の細胞は有効に分化して血となり肉となり骨となり、それが身体全体に行きわたるにちがいない。

陶芸家の加藤唐九郎さんは、こう言っていた。

「感覚の世界でやることは、あまり知識に関係ないですな。むしろ、知識のあることが邪魔になる場合が多いです。少しぐらい人間が馬鹿でも、感覚が鋭敏なら芸術の仕事は出来ると思いますな」